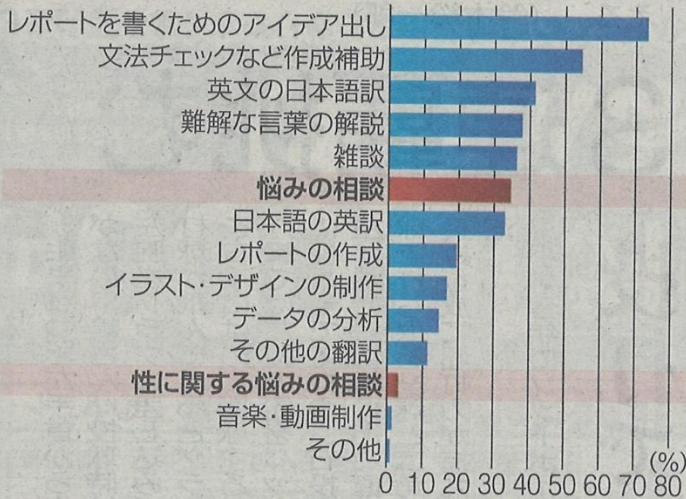


岡山大グループ県内調査

生成AIを利用したことのある学生の利用目的（複数回答）



調査は2025年6月、岡山県内の大学の学生647人を対象にAIの利用実態や目的などを尋ね、49人（男性118人、女性376人、その他4人）から回答を得た。回答率は77.0%。AIを利用したことがある人は全体の93.0%。利用目的（複数回答）のうち、全般的な「悩みの相談」に活用したのは34.7%。「性に関する悩み」に限った場合は3.2%にとどまった。「レポートを書くためのアイデア出し」（73.5%）「文法チェックなど作成補助」（54.8%）など学業関連での活用が上位だった。

AIに性の相談 学生88%肯定的

大学生は生成人工知能（AI）を性の悩みの相談相手として高く評価。性を巡るAIの活用実態を研究している岡山大の中塚幹也教授（生殖医学）らのグループがこんな調査結果をまとめた。実際に相談したのは少数にとどまるものの、相談先として約9割が肯定的に捉えていた。中塚教授は「AIは入力情報の範囲内でしか判断できず、誤認や偏りが生じる可能性がある。性に関する相談対応は専門性が不可欠で、回答をつのみにしないことが大切だ」と警鐘を鳴らす。（河内慎太郎）

質問次第でも 重大事例は専門家に

一方、性に関する悩みをAIに相談することに対して利便性が「ある」「どちらかといえばある」の合計は88.7%に上り、相談相手として前向きに捉える傾向がうかがえる。AIの回答そのものについて約6割が「信ぴょう性がある」としたことも踏まえ、中塚教授は「質問の仕方次第では誤った判断を導くリスクが高い」と指摘。「とりわけ予期しない妊娠への不安など緊急・重大なケースでは、必要な情報を聞き出してくれる専門家のいる相談窓口を利用してほしい」と話している。